

源氏物語

横笛

紫式部

青空文庫

亡なき人の手なれの笛に寄りもこし夢の

ゆくへの寒き夜半よはかな

(晶子)

権大納言ごんだいなごんの死を惜しむ者が多く、月日がたつても依然として

恋しく思う人ばかりであつた。六条院のお心もまたそうであつた。

御関係の薄い人物でも、なんらかのすぐれたところを持つている
者の死は常に悲しく思おぼしめ召す方であつたから、柏木かしわぎの衛門督えもんのかみ

はまして朝夕にお出入りしていた人であつたし、またそうした人
たちの中でも特に愛すべき男として見ておいでになつたのもあ
るから、一つの問題は別としてお心に上ることが多かつた。四十

九日の法事の際にも御厚志の見える誦^{ずき}經^{よう}の寄付があつた。何も知らぬ幼い人の顔を御覧になつてはまた深い悲哀をお感じになつて、そのほかにも法事の際に黄金百両をお贈りになつた。理由を知らぬ大臣はたびたび感激してお礼を申し上げた。大将もいろいろな形式で従^{いとこ}兄であり、夫人の兄であり、親友であつた大納言の法会を盛んにする志を見せ、一方ではこの際の御慰問として未亡人の一条の宮へも物を多くお贈りすることを忘れなかつた。兄弟以上の親切を故人のために尽くす大将を大臣も夫人も、これほどまでの志があるとは思わなかつたと喜んでいた。故人の持つていた勢力が法事の際にはなやかに現われたことなどからも両親はまた亡^なき子を惜しんだ。

御寺みでらの院いんは女二にょにの宮みやもまた不幸な御境遇におなりになったし、入道の宮も今日では人間としての幸福をよそにあそばすお身の上であるのを、御父として残念なお気持ちがあそばすのであるが、この世のことは問題にすまいとしいて忍んでおいでになった。仏勤めをあそばされる時にも、女三にょさんの宮みやもこの修業をしているであらうと御想像あそばすのであつて、宮が出家をされてからは、以前にも変わつてちよつとしたことにも消息を書いておつかわりになった。御寺に近い林から抜いた竹の子と、その辺の山で掘られた自然薯じねんじよが、新鮮な山里らしい感じを出しているのを快く思おも召ぼしめされて、宮へお贈りになるのであつたが、いろいろなことをお書きになったあとへ、

春の野山は霞かすみに妨さげられてあいまいな色をしています。その中であなたへと思つてこれを掘り出させました。少しばかりです。

世を別れ入りなん道は後おくるとも同じところを君も尋ねよ

それを成就させるためには、より多く仏の御弟子みでしとして努めなければならぬでしょう。

法皇のお手紙を涙ぐみながら宮が読んでおいでになる所へ院がおいでになった。宮が平生に違つて寂しそうに手紙を読んでおいでになり、漆器の広蓋ひろふたなどが置かれてあるのを、院はお心に不

思議に思召されたが、それは御寺から送っておつかわしになったものだった。御黙読になつて院も身に沁しんでお思われになるお手紙であつた。もう今日か明日かのように老衰をしていながら、逢うことが困難なのを飽き足らず思うというような章もある。この同じ所へ来るようにとのお言葉は何でもない僧もよく言うことであるが、この作者は御実感そのままであろうとお思ひになると、法皇はそのとおりに思召すであろう、寄託を受けた自分が不誠実者になつたことでもお気づかわしさが倍加されておいでになるであらうのがおいたわしいと院はお思ひになつた。宮はつつまじやかにお返事をお書きになつて、お使いへは青あおにび鈍色の綾あやの一ひとかさ襲ねをお贈りになつた。宮がお書きつぶしになつた紙の几帳きちようの

そばから見えるのを、手に取って御覧になると、力のない字で、

うき世にはあらぬところのゆかしくて背く山路そむに思ひこそ入

れ

とある。

「あなたを御心配していらつしやる所へ、あらぬ山路へはいりた
いようなことを言っておあげになつては悪いではありませんか」

こう院はお言いになるのであつた。出家後は前にいても顔をな
るべく見られぬようと宮はしておいになつた。美しい額の髪、
きれいな顔つきも、全く子供のように見えて非常に可憐かれんなのを御

覧になると、なぜこんなふうにさせてしまったかと後悔の念のつ
 くられることで、罪に一步ずつ近づく気があそばされるので、几
 帳だけを中の隔てには立てて、しかもうといふうには見せぬよう
 に院はしておいでになるのである。若君は乳母めのとの所で寝ていたの
 であるが、目をさまして這はい寄つて来て、院のお袖そでにまつわりつ
 くのが非常にかわいく見られた。白い羅うすものに支那しなの小模様のある紅
 梅色の上着を長く引きずつて、子供の身体からだ自身は着物と離れ離れ
 にして背中から後ろのほうへ寄つているようなことは小さい子の
 常であるが、可憐で色が白くて、身丈みたけがすんなりとして柳の木を
 削つて作ったような若君である。頭は露草しるの汁しるで染めたように青
 いのである。口もとが美しく、上品な眉まゆがほのかに長いところ

などは衛門督えもんのかみによく似ているが、彼はこれほどまでにすぐれた美貌びぼうではなかつたのに、どうしてこんなのであろう、宮にも似ていない、すでに気高けだかい風采ふうさいの備わっている点を言えば、鏡に写る自分の子らしくも見られるのであるとお思ひになつて、院は若君をながめておいでになるのであつた。立つても二足三足踏み出すほどになつているのである。この竹の子の置かれた広蓋ひろぶたのそばへ、何であるともわからぬまままで若君は近づいて行き、忙しく手で搔かき散らして、その一つには口をあてて見て投げ出したりするのを、院は見ておいでになつて、

「行儀が悪いね。いけない。あれをどちらへか隠させるといい。食い物に目をつけると言つて、口の悪い女房は黙つていませんよ」

とお笑いになる。若君を御自身の膝へお抱き取りになつて、

「この子の眉がすばらしい。小さい子を私はたくさん見ないせい
か、これくらいの時はただ赤ん坊らしい顔しかしていないものだ
と思つていたのだが、この子はすでに美しい貴公子の相があるの
は危険なこととも思われる。内親王もいらつしやる家の中でこん
な人が大きくなつていつては、どちらにも心の苦勞をさせなけれ
ばならぬ日が必ず来るだろう。しかし皆のその遠い将来は私の見
ることのできないものなのだ。『花の盛りはありなめど』（逢ひ
見んことは命なりけり）だね」

こうお言いになつて若君の顔を見守つておいでになつた。

「縁起のよろしくございませんことを、まあ」

と女房たちは言っていた。若君は齒莖から出始めてむずがゆい
氣のする齒で物が噛かみたいころで、竹の子をかかえ込んで雫しずくをた
らしながらどこもかも噛かみ試みている。

「変わった風流男だね」

と院は冗じょうだん談をお言いになって、竹の子を離させておしま
いになり、

憂うきふしも忘れずながらくれ竹の子は捨てがたき物にぞあり
ける

こんなことをお言いかけになるが、若君は笑っているだけで何

のことであるとも知らない。そそくさと院のお膝ひざをおりてほかへ
 這はつて行く。月日に添って顔のかわいくなつていくこの人に院は
 愛をお感じになつて、過去の不祥事など忘れておしまいになりそ
 うである。この愛すべき子を自分が得る因縁の過程として意外な
 ことも起こつたのであろう。すべて前生の約束事なのであろうと
 思おぼしめ召されることに少しの慰めが見いだされた。自分の宿命とい
 うものも必ずしも完全なものではなかつた。幾人かの妻さいしやう妾めかけの
 中でも最も尊貴で、好配偶者たるべき人はすでに尼になつておい
 でになるではないかとお思いになると、今もなお誘惑にたやすく
 負けておしまいになつた宮がお恨めしかつた。

大將は柏かしわぎ木が命の終わりにとどめた一言を心一つに思い出し

て何事であつたかいぶかしいと院に申し上げて見たく思い、その時の御表情などでお心も読みたいと願つてゐるが、淡くほのかに想像のつくこともあるために、かえつて思いやりのないお尋ねを持ち出して不快なお気持ちにおさせしてはならない、きわめてよい機会を見つけて自分は真相も知つておきたいし、故人が煩悶はんもんしてゐた話もお耳に入れることにしたいと常に思つてゐた。

物哀れな気のする夕方に大将は一条の宮をお訪ねたずした。柔らかいしめやかな感じがまずして宮は今まで琴などを弾ひいておいでになつたものらしかった。来訪者を長く立たせておくこともできなくて、人々はいつもの南の中の座敷へ案内した。今までこの辺の座敷に出でいた人が奥へいぎつてはいつた気配けはいが何となく覚えら

れて、衣きぬず擦れの音と衣の香が散り、艶えんな気分を味わった。いつも
の御息所みやすどころが出て来て柏木の話などを双方でした。自身の所は人
出入りも多く幾人もの子供が始終家の中を騒がしくしているのに
馴なれている大将には御殿の中の静かさがことさら身にしむように
思われた。以前よりもまた荒れてきたような気はするが、さすが
に貴人の住居すまいらしい品は備わっていた。植え込みの花草が虫の音
に満ちた野のように乱れた夕明りのもとの夜を大将はながめてい
た。そこに出たままになっていた和琴わごんを引き寄せてみると、それ
は律の調子に合わされてあつて、よく弾き馴ならされて人間の香に
染しんだなつかしいものであつた。こんな趣味の美しい女住居すまいに放
縦な癖のついた男が来たなら、自制もできずに醜態を見せること

があるのであろう、とこんなことも心に思いながら大将は和琴を弾いていた。これは柏木が生前よく弾いていた楽器である。ある曲のおもしろい一節だけを弾いたあとで、大将は、

「ことに和琴は名手というべき人でしたがね。忘れがたいあの人の芸術の妙味は宮様へお伝わりしているでしょうから、私はそれを承りたいのですが」

と言うと、

「あの不幸のございましたからは、全くこうしたことに無関心におなりあそばしまして、お小さいころのお稽古けいこび弾きと申し上げるほどのこともあそばしません。院の御前で内親王様がたにいろいろの芸事のお稽古をおさせになりましたころには、音楽の才はお

ありになるといような御批評をお受けあそばした宮様ですが、あれ以来はぼんやりとしておしまいになりました、毎日なさいますことはお物思ひだけでございますから、音楽も結局寂しさを慰めるものではないという気が私にいたされます」

と御息所は言う。

「ごもつともなことですよ。『恋しさの限りだにある世なりせば』（つらきをしひて歎かざらまし）」

大将は歎息たんそくをして楽器を前へ押しやった。

「楽器に故人の音がついているかどうか、私どもにわかりますほどお弾きになって見てくださいませ。はじめにめいっておりますわれわれの耳だけでも助けてくださいませ」

「私よりも御縁の深い方のあそばすものにこそ故人の芸術のうかがわれるものがあるでしょうから、ぜひ宮様のを承りたい」

御簾みすのそばに近く和琴を押し寄せて大将はこう言うのであるが、すぐに気軽に御承引あそばすものでないことを知っている大将は、しいても望みはしなかつた。月が上つてきた。秋の澄んだ空を幾つかの雁かりの通つて行くことも宮のお心には孤独でないものとしておうらやましいことであろうと思われた。冷やかな風の身にしむように吹き込んでくるのにお誘われになつて、宮は十三絃をほのかにお掻かき鳴らしになるのであつた。この情趣に大将の心はいつそう惹ひかれて、より多くを望む思いから、琵琶びわを借りて想夫そうふれ恋んを弾き出した。

「自信のあるものらしく見えますのが恥ずかしゆうございますが、この曲だけはごいっしよにあそばしてくだすつてよい理由のあるものですから」

と大将は御簾みすの奥へ合奏をお勧めするのであるが、他のものよりも多く羞恥しゆうちの感ぜられる曲に宮はお手を出そうとあそばさない。ただ琵琶の音に深く身にしむ思いを覚えてだけおいでになる宮へ、

ことに出いで言はぬを言ふにまさるとは人に恥ぢたる気色けしきとぞ
見る

と大将が言った時、宮はただ想夫恋の末のほうだけを合わせてお弾きになった。

深き夜の哀ればかりは聞きわけどことよりほかにえやは言ひける

ともお言いになるのであつた。非常におもしろいお爪つま音おとであつて、おおまかな音ねの楽器ではあるが、芸の洗練された名手が熱心にお弾ひきになるのであるから、すごい気分のような透徹した音を、美しく少しだけお聞かせになつておやめになつたのを、大将は恨めしいまでに飽き足らず思うのであるが、

「風流狂じみしましたことをいろいろお目にかけてしまいました。秋の夜を無限におじやまいたしておりましては故人からとがめられる気もいたしますから、もうお暇いとまをいたしましょう。また別の日に新しい気持ちで御訪問をいたします。この楽器をこのままにしてお待ちくださるでしょうか。意外なことが起こらないともかぎらない人生のことですから不安なのです」

などと言つて、正面から恋を告げようとはしないのであるが、におわせるほどには言葉に盛つて大将は帰ろうとした。

「今夜の御風流は非難いたす者もございませんでしょう。昔の日の話をお補いくださいます程度にしかお聞かせくださいませんでしたのが残り多く思われてなりません」

と言ひ、御息所は大將への贈り物へ笛を添えて出した。

「この笛のほうは古い伝統のあるものと伺つておりました。こんな女住居ずまいに置きますことも、有名な楽器のために気の毒でござい
ますから、お持ちくださいましてお吹きくださいませば、前驅の
声に混じります音を楽しんで聞かせていただけるでしょう」

と御息所は言つた。

「つたない私がいただいてまいることは似合わしくないことでは
よう」

こう言いながら大將は手に取つて見た。これも始終柏木が使つ
ていて、自分もこの笛を生かせるほどには吹けない。自分の愛す
る人に与えたいとこんなことを柏木の言うのも聞いたことのある

大将であつたから、故人の琴に対した時よりもさらに多くの感情が動いた。試みに大将は吹いてみるのであつたが、盤ばん涉しき調を半分ほど吹奏して、

「故人を忍んで琴を弾きましたことはとにかく、これは晴れがましいまばゆい気がいたされます」

こう挨拶あいさつして立つて行こうとする時に、

露しげき葎むぐらの宿しゆくにいにしへの秋に変はらぬ虫の声かな

と御息所が言いかけた。

横笛の調べはことに変はらぬをむなしくなりし音こそ尽きせ
ね

返歌をしてもまだ去りがたくて大將がためらっているうち深更
になった。

自宅に帰つてみると、もう格子などは皆おろされてだれも寝て
しまつていた。一条の宮に恋をして親切がつた訪問を常にすると
いうようなことを、夫人へ言う者があつたために、今夜のように
ほかで夜ふかしをされるのが不愉快でならない夫人は、良人が室
内へはいつて来たことも知りながら寝入つたふうをしているもの
らしい。「妹とわれといふさの山の山あららぎ」（手をとりふれ

ぞや、かほまさるかにや」と美しい声で歌いながらはいつて来た
大將は、

「どうしてこんなに早く戸を皆しめてしまったのだらう。引つ込
み思案な人ばかりなのだね。こんな月夜の景色をだれも見ようと
しないなど」

と歎息たんそくして格子を上げさせ、御簾みすを巻き上げなどして縁に近
く出て横たわっていた。

「こんなよい晩に眠ってしまう人があるものですか。少し出てい
らっしゃい。つまらないじゃありませんか」

などと夫人へ言うのであるが、おもしろく思っていない夫人は
何とも言わないのである。子供が寝おびれて何か言っている声が

あちこちにして、女房もその辺の部屋へやにたくさん寝ている、このにぎわしい自宅の夜と、一条邸の夜とのあまりにも相違しているのを大将は思い比べていた。贈られた笛を吹きながら自分の去つたあとの御母子がどんなに寂しく月明の景色をながめておられるだろう、自分の弾いた楽器も宮の合わせてくださつたものもそのままで二人の女性にもてあそばれているであろう、御息所も和琴が上手じょうずなはずであるなどと思いやりながら寝ているのである。どうしてあんなにりっぱな宮様を衛門督えもんのかみは形式的に大事がっただけで、ほんとうに愛してはいなかつたのであろうと大将は不思議に思われてならない。お顔を見て美しく想像したのと違つたところがあつては不幸な結果をもたらすことにもなろう、ほかのこ

とでも空想をし過ぎたことには必然的に幻滅が起こるものであるなど思いながらも、大将は自身たち夫婦の仲を考えて、なんらの見栄みえも気どりも知らぬ少年少女の時に知った恋の今日まで続いて来た年月を数えてみては、夫人が強い驕きょう慢まんな妻になっているのに無理でないとところがあるとも思われた。

少し寝入ったかと思うと故人の衛門督がいつか病室で見た時の桂姿うちぎでそばにいて、あの横笛を手に取っていた。夢の中でも故人が笛に心を惹ひかれて出て来たに違ちがいがないと思つていと、

「笛竹に吹きよる風のごとならば末の世長き音ねに伝へなん

私はもつとほかに望んだことがあつたのです」

と柏木は言うのである。望みということをよく聞いておこうとするうちに、若君が寝おびれて泣く声に目がさめた。この子が長く泣いて乳を吐いたりなどするので、乳母めのとが起きて世話をするし、夫人も灯ひを近くへ持つて来させて、顔にかかる髪を耳の後ろにはさみながら子を抱いてあやしなどしていた。色白な夫人が胸をひろ拡げて泣く子に乳などをくくめていた。子供も色の白い美しい子であるが、出そうでない乳房ちっぷさを与えて母君は慰めようとつとめていたのである。大将もそのそばへ来て、

「どう」

などと言っていた。夜の魔を追い散らすために米なども撒まかれ

る騒がしさに夢の悲しさも紛らされてゆく大将であった。

「この子は病氣になったらしい。はなやかな方に夢中になっていらつして、おそくなつてから月をながめたりなさるつて格子をあけさせたりなさるものだから、また物もののけ怪がはいつて来たのでしよう」

と若々しい顔をした夫人が恨むと、良人はおっと笑つて、

「変にこじつけて私の罪にするのですね。私が格子を上げさせなかつたらなるほど物怪ははいる道がなかつたらうね。おおぜいの人のお母様になつたあなただから、たいした考え方ができるよになつたものだ」

こう言つても妻をながめる大将の美しい目つきはさすがに恥ず

かしがって、続けて恨みも言わずに、

「あちらへいらっしやい。人が見ます。見苦しい」

とだけ言った。明るい灯ひに顔を見られるのをいやがるのも可憐かれんな妻であると大将は思った。若君は夜通しむずかかって寝なかつた。

大将は夢を思うと贈られた横笛ももてあまされる気がした。故人の強い愛着の遺のこった品がやりたく思う人の手に行つていぬものらしい。しかも宮の御もとへ置きたく思う理由もない。それは笛が女の吹奏を待つものでないからである。生きておれば何とも思わぬことが臨終の際にふと気がかりになったり、ふと恋しく心が残つたりすることで幽魂が浄土へは向かわず宇宙に迷うと言われている。そうであるから人間は何事にも執着になるほどの関心を

持つてはならないのであると、こんなことを思つて大納言のためにおたぎ愛宕の寺でずきよう誦経をさせ、またそのほか故人と縁故のある寺でも同じく経を読ませた。この笛を歴史的価値のある物として、好意で自分へ贈つた人に対しては、それがどんな尊いことであつても寺へ納めたりしてしまふことも不本意なことであると思つて、大將は六条院へ参つた。

その時院は姫君の女御にようしの御殿へ行つておいでになつた。三歳ぐらいになつておいでになる三の宮を女一の宮と同じように紫の女よおう王がお養いして、対へお置き申してあるのであるが、大將が行くと走つておいでになつて、

「大將さん、私を抱いてあちらの御殿へつれて行つてちようだい」

うやうやしい態度で、そしてお小さい方らしくお言いになると、大将は笑つて、

「いらつしやいませ。けれど女王様のお御簾みすの前をどうしてお通りいたしましたしょう。私よりもあなた様がお困りになりましたしょう」
こう言いながらすわつた膝ひざへ宮を抱いておのせすると、

「だれも見ないよ。いいよ。私顔を隠して行くから」

宮が袖そでを顔へお当てになるのもおかわいらしくて大将はそのまま寝殿のほうへお抱きして行つた。

こちらの御殿のほうでも院が宮の若君と二の宮がいつしよに遊んでおいでになるのをかわいく思つてながめておいでになるのであつた。かどのお座敷の前で三の宮をお下おろししたのを、二の宮

がお見つけになつて、

「私も大将に抱いていただくのだ」

とお言いになると、三の宮が、

「いけない、私の大将だもの」

と言つて伯父君おじの上着を引っぱつておいでになる。院が御覽になつて、

「お行儀のないことですよ。お上かみのお付きの大将を御自分のものにしようとお争いになつたりしてはなりませんよ。三の宮さんはよくわからずやをお言いになりますね。いつでもお兄様に反抗をなさいますね」

とお訓さとしになる。大将も笑つて、

「二の宮様はずいぶんお兄様らしくて、お小さい方によくお譲りになったり、思いやりのあることをなさいます。大人でも恥ずかしくなるほどでございます」

こんなことを言っていた。院は微笑を顔にお浮かべになつて、お小言^{こごと}はお言いになつたものの、どちらもかわいくてならぬというような表情をしておいになつた。

「公卿^{こうけい}をこんな失礼な所へ置いてはおけない。対のほうへ行くことにしよう」

とお言いになつて、立とうとあそばされるのであるが、宮たちがまつわつてお離れにならない。宮の若君は宮たちと同じに扱^{おぼしめ}べきでないとお心の中では思召されるのであるが、女三の尼宮

が心の鬼からその差別待遇をゆがめて解釈されることがあつてはと、優しい御性質の院はお思ひになつて、若君をもおかわいがりになり、大事にもあそばすのであつた。大将はこの若君をまだよく今までに顔を見なかつたと思つて、御簾みすの間から顔を出した時に、花の萎しおれた枝の落ちているのを手に取つて、その児こに見せながら招くと、若君は走つて来た。薄うす藍あゐ色の直衣のうしだけを上に着ているこの小さい人の色が白くて光るような美しさは、皇子がたにもまさつていて、きわめて清らかな感じのする子であつた。ある疑問に似たものを持つ思ひなしか、眸まなざしなどにはその人のよりも聡そう慧けいらしさが強く現われては見えるが、切れ長な目の目じりのあたりの艶えんな所などはよく柏木かしわぎに似ていると思われた。美し

い口もとの笑う時にことさらはなやかに見えることなどは自分の心に潜在するものがそう思わせるのかもしらぬが、院のお目には必ずお思い合わせになることがあるうと考えられるほど似ていると、大將は異母弟を見ながらも、いよいよ院が柏木に対してどう思つておいでになるかを早く知りたくなつた。宮がたは自然に氣^け高くお見えになるところはあるが、普通のきれいな子供とさまで変わつてはおいでにならないのに、若君は貴族の子らしい品格のほかにも、何ものにも優越した美の備わつてゐるのを、大將は比べて思いながら、哀れなことである、自分の推測が眞実であれば柏木の父の大臣は故人を切に思う心から、柏木の子供であると名がつて来る者の出て来ないことに失望して、それだけの形見をすら

不幸な親に残してくれなかったと言つて泣きこがれているのであるから、知らせないでいるのは罪作りなことにならうと考えられて来るうちにまた、そんなことはありうることはないと否定もされる。ますます不可解な問題であると大将は思った。性質もなつかしく優しい子で、大将に馴染なじんでそばを離れず遊んでいるのもかわいく思われた。

院が対のほうへおいでになつたのでお供をして行つて大将がお話をかわしているうちに日も暮れかかつてきた。昨夜一条の宮をお訪たずねした時のあちらの様子などを大将が語るのを院は微笑して聞いておいでになつた。故人に關することが出てくる時には言葉もおおはさみになつて同情して聞いておいでになるのであつたが、

「想夫恋を少しお合わせになつたということなどは非常におもしろくて文学的ではあるが、しかし自分の意見として言えば女は異性を知らず知らず興奮させるような結果までを考慮してどこまでも避けねばならぬことだと思ふがね、故人への情誼よしみで御親切にし始めたのであれば、君はどこまでもきれいな心でお交際つきあいをしなければならぬよ。あやまちのないようにね。苦しい結果を引き起こすようなことのないようにするのがどちらのためにもいいことだろうと思ふ」

と院はお言いになつた。大将は心に、このお言葉は承服されな
い、人をお教えになるのには賢いことを仰せられても、御自身が
この場合に処して御冷静でありうるであろうかと思つていた。

「あやまちなどの起こりようはありません。人生の無常に直面されたかたがたを宗教的な気持ちで慰めて差し上げる義務があるように思いました。お交つきあい際を始めたのですから、すぐまたその友情から離れますようなことをしましては、かえって普通の失敗した野心家らしく世間から思われるだろうと考えますから、いつまでも友情は捨てないつもりでおります。想夫恋をお弾ひきになりました。たことで御非難のお言葉がございましたが、あちらが進んでなすったことであればそれは決しておもしろい話ではございませんが、私の参ります前から弾いておいでになりました琴を、ただ少しばかり私の想夫恋に合わせてくださいましたのですから、非常にその場の情景にかなってよかったのでございます。どんなこともそ

の女性次第だと思えます。御年齢などもきらきらとする若さを少し越えていらつしやいます方が、好色漢のような態度をお見せするはずもない私に、親しい友情が生じまして、私の願ったことが聞いていただけたというようなことは恥ずかしいこととは思われません。御觀察申し上げるところでは非常に女らしい優しい御性質のようです」

こんな話をしていた大将は、かねて願っている機会が到来したように思い、少し院のお座へ近づいて昨夜ゆうべの夢の話をした。ものも言わずに聞いておいでになった院のお心の中にはお思い合わせになることがあった。

「その笛は私の所へ置いておく因縁があるものなのだよ。昔は陽よ

成院うぜいの御物ぎよぶつだったものなのだがね。私の叔父おじのお亡なくなりになつた式部卿しきぶきょうの宮が秘蔵しておいでになつたのを、あの衛門えもん督かみは子供の時から笛がことによくできたものだから、宮のお邸やしきで萩はぎの宴のあつた時に贈り物としてお与えになつたのだ。御婦人がたは深いお考えもなしに君へ贈られたのだろう」

院はこうお言いになるのであつた。御心中ではまず手もとへ置こう、死後にもとの持ち主の譲らせた人おぼしめは分明であると思召おぼしめされた。聡明そうめいな大將にはもう想像ができていて、今持ち合わせてもいるのであろうとお思いになるのであつた。すべてを察しになつた院のお顔色を見てはいっそう大將は打ち出しにくくなるのであるが、ぜひ伺つてみたい気持ちがあつて、ただこの瞬間に心

へ浮かんできたというようにして、思い出し思い出し申すように言う、

「もう衛門督が終しゅうえん焉んに近いところでございました。見舞いにま
いりました私に、いろいろ遺言をいたしました中に、六条院様に
対して深い罪を感じているということを繰り返し繰り返し言った
のでございましたが、ただ御感情を害していると聞きましただけ
では、私によくわからないのでしたが、どんなことだったのでご
ざいましょう。ただ今もまだよくわからないのでございます」

自分が感じたように大将はあの秘密の全ぜんぼう貌ぼうを知っているの
であると院はお悟りになったのであるが、くわしくお語りになるべ
きことでもないので、しばらくは突然いぶかしい話を聞くという

ような御表情を見せておいでになったあとで、

「そんなに死んで行く時にまで人の気にかけるようなことはいつ自分が言ったりしたりしたのだろう。私にもわからない、思い出せないよ。いずれ静かな時を見て君の夢に関する細かな説明はしてあげよう。夢の話は夜はしてならないものだから、迷信だろうが女の人などは言うものだよ」

と院は言っておいでになって、あの不思議な問題にはあまり触れようとあそばさないので見て、大将は自分の言い出したということがお気に入らないのではないかと、きまり悪く思ったのである。

青空文庫情報

底本：「全訳源氏物語 中巻」角川文庫、角川書店

1971（昭和46）年11月30日改版初版発行

1994（平成6）年6月15日39版発行

※このファイルは、古典総合研究所 (<http://www.genji.co.jp/>) で入力されたものを、青空文庫形式にあらためて作成しました。

※校正には、2002（平成14）年1月15日44版を使用しました。

入力：上田英代

校正：kumi

2003年10月4日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

源氏物語

横笛

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

著者 紫式部

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>